

- * ペンテコステで120人の弟子たちの上に降った聖霊はそれぞれ、彼らが知るはずのない外国の言葉を話し出した。その内容は「神の大きなみわざ」すなわち、イエス・キリストの福音である。ペテロはこの現象の説明を皆に説明するために説教をする。その説教で人々はこころを刺されるほどに自分の罪を明らかにされ、イエス・キリストを信じて救われた。その数3千人。これらの人々がこの後どうしたかが、教会の原点である。
- * 「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」(使徒2:42) 原文では動詞は一つで、「熱心であった」「専念していた」という意味である。すなわち、彼らは4つのことに熱心であった。「使徒たちの教えに」「交わりに」「パン裂きに」そして「祈り」に熱心であったという意味になる。
1. 彼らは使徒たちの教えを熱心に知ろうとし、理解して受け入れ、忠実に従っていた。「使徒たち」とは、イエス・キリストの直弟子、すなわち主イエスと直接話をしたり、聞いたりし、主イエスのわざを見、十字架を見、復活の主イエスに出会った弟子たちである。現代の私たちには、聖書が与えられていて、聖書から正しい解釈により正しい教えを知ることができる。これらができるのは聖霊の働きである。
 2. クリスマンの交わりも聖霊によって生まれ、導かれる。原語では「コイノニヤ」であり、「共有」「共通」を意味する。彼らがしたことは先ず、物の共有であった。「信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。」(使徒2:24~25) 物だけではなく、「恵みの共有」でもあった。「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、」(2:26) 彼らは主イエスにある恵みの分かち合いをするために毎日顔を合わせていた。様々な背景の人達が集まったが、そこには御霊による一致があった。
 3. 「パンを裂く」ことは、聖餐をするという意味である。共に食事をする中で、特別にイエスのからだであるパンを裂き、血であるブドウ酒をいただくという儀式をしていた。聖餐は礼拝の大切な部分である。彼らは宮に集まっては主を礼拝し、家では聖餐の礼拝をしていたのである。
 4. 祈りはクリスマンにとって呼吸のようなものと言われる。呼吸をしなければ肉体は死ぬのと同じように、祈りをしなくなれば霊的ないのちは死ぬ。私たちは神様との交わり的手段として祈りという恵みを与えられている。初期教会の人たちが集まって行ったすべてのことは祈りによって支えられていた。一緒に一身に祈っている時は、必ず御霊が働いてみこころを示してくださるのである。不思議な安心感と充実感がある。初期教会の姿は、すべて聖霊によって生み出されたものである。